

東洋陶磁学会第 51 回大会

研究発表要旨

「一乗谷朝倉氏遺跡の研究の最新成果 および中世から現代までの越前焼」

2024 年 11 月 15 日・16 日・17 日

越前陶芸村（福井県陶芸館・越前古窯博物館）
福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館 講堂
越前町織田コミュニティーセンター 多目的ホール

< 基調講演 >

一乗谷と生産地—都市を支えた生産地、生産地を育てた都市— …………… 小野 正 敏

< 研究発表 >

一乗谷朝倉氏遺跡第 18 次調査出土資料に見る一乗谷の土師器皿の様相 …………… 吉 田 悠 歩
越前窯跡群における生産地遺跡の様相 …………… 木村 孝一郎
中世越前焼の消費と流通—主に北方について— …………… 森 まどか

< 対談・鼎談 >

越前焼伝統工芸士との対談「自作と越前での活動について」……………（聞き手）橋詰果歩
宗倉克幸（宗山窯）・司辻健司（光窯）・近藤修康（萌蘖窯）・福島宏治（焰奏窯）
鼎談「越前焼のこれまでとこれから」……………日向 光 ・ 伊藤嘉章 ・ 橋詰果歩

東 洋 陶 磁 学 会

2024

—都市を支えた生産地、生産地を育てた都市—

小野正敏

中世のキーワードのひとつが「都市と商品の時代」であり、その基盤には13世紀頃から急速に展開した銭経済があった。都市住民の大きな消費力やニーズが生産や流通にも強く影響し、関与した。一方、都市は、耐久消費財はいうに及ばず、日々必要な薪炭や食料等まで、商品流通によって存在が可能となる相互依存の関係でもある。

中世の生産地は、生産を規定する主要素の強弱の視点から整理すると、都市や町、村等の消費地型、湊や宿等の流通拠点型、原材料や燃料、大規模施設と技術集積に規定される資源産地型に代表される。

今回テーマとする、戦国期の都市と生産地について、一乗谷と越前を材料として考える意義は次の3点である。①都市全体の大きな消費と流通の実態が精緻な考古資料で担保される、②都市内生産と共に、領国内に越前焼、笏谷石、浄教寺砥石、和紙等の生産地をもつ、③一乗谷が町立てした15世紀後葉は、列島規模で各地に城下町をはじめ都市が成立、整備された時期であり、都市と生産、流通について共通の論点を展開できる。こうした視点から、以下のような論点について述べたい。

1 狂言「塗師」と一乗谷産の商品

- ・谷内生産品の位置づけ、一乗谷ブランド商品の生産

- 2 戦国期の大量消費を支えた平等村の生産革新
 - ・出土陶磁器の生産地と消費量
 - ・15世紀後葉の大量消費への対応
 - ① 窯の規模拡大と構造革新による焼成量の増大と操業サイクルの短縮
 - ② 器種とサイズをそろえた少器種画一による生産と流通の効率化
 - ③ 窯の集約と共同窯操業に適した生産体制の実現
 - ・大規模生産の影響、異業種との山林資源の競合と争奪戦
- 3 一乗谷と近郊生産地、浄教寺砥石、笏谷石製品

*なお、各テーマについての詳細やデータは下記拙著を参照されたい。

2006 「戦国期の都市消費を支えた陶器生産地の対応—越前焼を例に」『国立歴史民俗博物館研究報告』127

2015 「「木」資源と山野、その競合と争奪」『木材の中世—利用と調達』考古学と中世史研究 12 高志書院

2019 「場からみる中世のモノづくり」『中世のモノづくり』朝倉書店

2023 「一乗谷、城下町の陶磁器消費への視点」『貿易陶磁研究』No.43

一乗谷朝倉氏遺跡第 18 次調査出土資料にみる 一乗谷の土師質皿の様相

吉 田 悠 歩

今回の発表では、一乗谷朝倉氏遺跡第 18 次調査で出土した土師質皿生産に関わるとみられる資料を中心に、一乗谷における土師質皿の様相について述べる。

1976 年に行った一乗谷朝倉氏遺跡第 18 次調査（現在整理作業中）では、溝で区画された小規模の区画が道に面して並んでいることを確認した。区画の中には越前焼の大甕 8 個体を埋設した遺構などが見られることから、職人などの暮らした町屋の跡と考えられている。なかでも、失敗品を含む多量の土師質皿や窯体の破片とみられる焼土塊など、土師質皿生産に関わる遺物が出土したことは、一乗谷における土師質皿の生産とその様相を示すものとして注目されてきた。しかし、概報のみで正式な発掘調査報告書が未刊行であるため、その詳細は明らかではなかった。

今回、発掘調査報告書刊行に向けた資料整理を行う機会を得たため、第 18 次調査出土の土師質皿の中から生産に関する資料についてまとめると共に、一乗谷の他の地点からの出土資料との比較を試みた。

具体的な作業としては次の 3 つを行った。①現地で生産されたとみられる資料の抽出、②抽出した資料の特徴の検討、③一乗谷朝倉氏遺跡の他の地点で出土した資料との比較。

①について、今回の資料は集落遺跡の中世整地土からの出土であるため、一般的な窯跡や灰原出土資料のように、推定される場の機能や出土状況によって、遺物の性格や一括性が容易に保証されるものではない。したがって、資料の特徴を検討する前に、現地で生産したと解釈しうる何らかの指標を設定し、資料を抽出する必要がある。今回は、a. グリッド別出土点数の検討による土師質皿集中部の特定、b. 使用痕の認められる土師質皿の分布の検討、の 2 つの検討を行い、出土地点と層位を指標として現地で生産されたとみられる資料の抽出を試みた。

①により抽出した資料を検討した結果、形態と製作技術の点では、一部に特殊な器形がみられるものの、多くは一乗谷朝倉氏遺跡で広くみられるものと共通する特徴を有すること、胎土はネオジム磁石に反応するものが多数を占めることを見出した。

③では、②で把握した特徴を手掛かりに、一乗谷朝倉氏遺跡の他の地点で出土した土師質皿との比較を行った。

これらの作業によって、一乗谷の中で生産された土師質皿の谷の中での動態の一端を明らかにすることができた。

越前窯跡群における生産地遺跡の様相

木 村 孝一郎

越前窯跡群は開窯から現在まで稼働する北東日

本海域を代表する瓷器系窯業地である。福井県丹

生郡越前町織田・宮崎と一部越前市におよぶ南北約6 km、東西約3 kmの範囲に200基程の窯跡が分布することが水野九右衛門の分布調査により判明し、近年の調査でも約170基が確認されている。また各窯跡の時期別の分布状況と変遷も筆者の編年案に基づいて追える状況に至っており、それと呼応する器種組成と流通の変遷も把握されているなど、その研究は一定の水準に達しつつある。

越前古窯跡群は、独立した丘陵や支谷などに密接して一定期間継起的に稼働する複数基の窯からなる小群が、小河川流域の小地域である小曾原・熊谷・平等・織田を基盤とし操業時期の異なる複数群で構成する支群の複合体で、各支群が狭域に分布することを特徴とする。現状で各小群は、越前町平等・織田・山中地区が、建保6年(1218)に高階宗泰が後鳥羽上皇の生母七条院に領家式を寄進し立荘した織田荘、同町小曾原・増谷・古谷・熊谷地区および越前市曾原・安養寺地区が、文応元年(1260)

には国衙領であった山干飯保と異なる領域に属する。これまでの研究は異なる領域に分布する小群を区別せずに論じられてきたが、それらを区別するとこれまでとは異なる生産地遺跡の様相を示すことができる。それは14世紀中頃以前の「刈り回し」生産後の熊谷支群と平等支群の專業度の違いであるが、これは平等支群が小群を大釜谷窯跡群に集約して以降は同窯跡群で生産を継続するが、熊谷支群は小群が移動を繰り返した後に生産を止める点に明確である。このように平等支群は拠点的かつ專業的に生産を行う体制に移行したと考えるが、この專業度の高さこそが15世紀末以降の大釜谷窯跡群での大量生産の土台となったものと理解できる。17世紀後葉に小群は平等集落周辺へ移動し、近世後期からは他産地の技術を導入して生産を続けるが、その流れは14世紀中頃の小群の集約に始まるものと思われる。

《研究発表3》 中世越前焼の消費・流通について —主に北方を中心に—

森 まどか

令和3年度福井県陶芸館開館50周年記念の特別展前期において、北海道・東北地方の各県の研究者の方々を招き、越前焼の各県における出土状況等を特別展関連フォーラムにて発表いただいた。それにより、より詳細な越前焼の出土状況や使用状況が論じられ、他産地の陶磁器とともに越前焼の様相が提示された。今回、越前焼の消費・流通という題目で発表させていただく機会を得たため、フォーラムでの各研究者の発表をもとにまとめを行う。

県外で一番古手のものは隣国、加賀国南部において12世紀末とみられる甕が見つかっているが、それでも搬入量としては僅少である。13世紀後半になると同地域で珠洲焼、加賀焼と拮抗する形で

越前焼の搬入量が増加している。一方、青森県十三湊遺跡でも13世紀後半の甕が一定量運ばれてきており13~15世紀前半にかけては、その他の北方地域で越前焼が見られるのは極めて僅かである。運ばれてきているものは甕類が多く、播鉢はほぼ皆無であった。

15世紀後半になると、それまで日本海域一帯を掌握していた珠洲窯が衰退・廃窯し、越前焼の流通が増加する。特に越前焼の播鉢の搬入量は激増し、北海道勝山館跡では壺甕類を圧倒して出土している。15世紀後半以降の播鉢は、需要に応えた大量生産から軟質なものも多くみられ、使いすぎて内面の摺目が確認されなくないものもみられる。さらに内面には被熱した痕跡がみられ、使いすぎて

摺目がなくなった後、火鉢のように使用されたと
思われる。

山形県では沿岸部に近い遺跡で播鉢が多くみら
れるが、内陸に入るにつれ少なくなっており、確認
されるのは壺甕類のみである。しかし、秋田県の雄
物川流域の遺跡では内陸部でも播鉢が流通してい
たことが窺える。福島県・宮城県・岩手県では越前
焼の流通圏の外縁として、日本海側から山を越え
て搬入されてきたことが指摘されており、これら

もまた、甕類が多くみられる。その理由として、壺
甕類は「コンテナ」の役割があったことが想定さ
れている。

越前の窯場では窯が大型化していき、北廻りの
航路が越前焼の販路に活発に利用され、北への需
要や中世都市の大量消費に応えられる体制が確立
していく。多様な形や、様々な容積の越前焼が作ら
れ、北東日本海域一帯を流通圏におき、一大窯業地
としての地位を納めていくのである。

《対談》 越前焼伝統工芸士との対談「自作と越前での活動について」

宗倉克幸・司辻健司・近藤修康・福島宏治、(聞き手)橋詰果歩

越前焼は1971年に越前陶芸村が出来たことによ
り窯元数が増加し、現在約80軒余りが活動してい
る。1986年に伝統的工芸品として指定を受けた越
前焼には10名の伝統工芸士がおり、今回は4名が
自作や越前における活動について語る。

越前市生まれの宗倉は京都府立陶工職業訓練校
や京都宇治川炭山の林山陶苑を経て、1993年から
実家である宗山窯にて作陶している。四季折々に
移ろっていく越前の空の景色を模様落とし込んだ
「空模様シリーズ」、削りによって木の彫り物
のような雰囲気を出す「陶木シリーズ」など越前土
の素朴で温かい質感を活かし、風土に根差した暮ら
しの器を手がけている。2014年から越前焼伝統工
芸士会会長、2023年から越前焼工業協同組合副理
事長を務め、県内外の職人との交流を積極的に行
う。

越前町(旧宮崎村)生まれの司辻は大阪美術専門
学校芸術研究科を修了し、1994年に実家の光窯で
作陶を開始した。1998年日展初入選、2008年日展
会友となり、2021年第8回日展にて特選となった。
近年手掛けている作品は、盛夏の越前海岸で美し
い色や空気の変化を見せる夕景をテーマとしてお
り、タタラ成形の板を重ね、影や奥行きを出す点が
特徴である。薄造りを得意とし、釉薬の代わりに漆

を用いる「陶漆紙」のシリーズも手掛ける。実用的
な製品は2014年に第55回全国推奨観光土産品審
査会にて経済産業大臣賞、2018年に全国伝統的工
芸品展にて経済産業大臣賞を受賞し、高い評価を
得ている。

東京都生まれの近藤は焼締陶の作家・埴幸次郎
氏に師事したのち、福井県窯業指導所にて研修し
た。8代目藤田重良右衛門氏に師事し、伝統技法で
ある「越前ねじたて技法」を習得、1998年に越前
町大谷にて独立する。轆轤を使わず成形するシル
エットの美を追求し、現在は室町期の越前壺や東
洋の工芸品の形を参考にしつつ、薪窯による冷却
還元によって作品を焼成している。2014年にフラ
ンス・パリにて「越前焼六人展」、2018年に第21
回日本伝統工芸士会作品展にて入賞するなど活躍
の場を広げている。

福井市生まれの福島は、越前焼窯元である大森
正人氏に師事し、1999年に生家の近くで独立した。
2005年に福井市美山地区(旧美山町)の山間に半
地下式穴窯を築窯し、様々に変化していく灰の表
情や荒い越前土の石ハゼを活かした自然釉の作品
を手がける。並行して初期の頃から規則的に搔き
落としの線を刻む「流線文シリーズ」など釉薬を用
いる装飾を手がけ、線から生まれる模様とモダン

な形を追求している。福井県内を中心に作品を発表し、次世代への越前焼普及にも努めている。

出身地や得意とする技法、作品発表の場がそれぞれ異なる 4 名の対談を通じて現在の越前焼の一

端を紹介し、越前土の特徴や後継者問題、窯元の組織化など越前における課題や展望などを共有することを旨とする。

《鼎談》 越前焼のこれまでとこれから

日向 光・伊藤嘉章・橋詰果歩

本鼎談は、越前焼の過去を振り返り、現状を分析し概観したうえで、越前焼の未来を考えることを目的とする。

越前焼の過去は試験場・陶芸村・陶芸館、3つに視点を置くことで、1945年から2018年までを4つの画期に分けて見ることができる。そこから現在に繋がる越前焼の歴史を紐解いていく。

第Ⅰ期「越前焼の序章」（1945～1970）は1947年小山富士夫氏が『陶磁味』に「越前の古窯」を発表したことを始まりとする。この時期、越前焼は存続の危機にあったが、1948年に福井県窯業試験場が設置され、1960年代に窯元組織化の機運が高まる。初期の越前焼研究や、「六古窯」のひとつとなる中で陶芸村建設以前の産業としての越前焼の状況を見ていく。

第Ⅱ期「越前焼 始まり、集まり、深まり」（1971～1984）は1971年他県に先駆けて実現された陶芸村構想を越前焼の1つ目の転機として取り上げる。陶芸村ができたことにより、全国から若手の陶芸家たちが集まる。彼らは他産地から訪れる指導者たちに刺激を受け、積極的に公募展に出品した。研究方面では、上長佐古窯等の調査によって古越前の解明が進展する時期でもある。「越前焼」としての自立や、窯跡発掘調査による研究の深まりについて着目する。

第Ⅲ期「越前焼 それぞれの追求」（1985～2008）は1985年福井県窯業試験場が工業技術センターに吸収・合併されたことを2つ目の転機として取り上げる。越前焼の伝統的工芸品指定、また復元古

窯焼成実験や、あな窯ブームがあった。陶芸家たちは個々の表現を追求し、東京やアメリカにおける展示会において越前焼を世界に押し出していった。陶芸館の動向も確認しながら越前焼産地が産業から陶芸家の集まりへとシフトしていくことを見ていく。

第Ⅳ期「越前焼に吹く新たな風とは」（2009～2018）は、2009年福井県陶芸館および越前陶芸村文化交流会館が指定管理となったことや、窯業指導所が窯業指導分所に規模縮小したことを3つ目の転機として取り上げる。窯元増加によって求められた新しい繋がり「ふくい陶ネットワーク」の設立などに着目する。研究方面では水野コレクションが登録有形文化財に指定され、越前古窯博物館が開館した。その一方で復元古窯による焼成実験を行ったようなⅢ期までの熱気にかげりが見える。

越前焼の現在については陶芸村内組織の近年の状況を確認したうえで、窯元約85軒の分析を行う。窯元の約4割はテーブルウェアや日常食器が主となり、伝統的な自然釉の越前焼を中心に取り組むのは約2割。約4割が薪窯を保有するが、世代を追うごとに薪窯を持つ窯元は減少傾向と、越前焼のあり方は急激に変化している。窯元の約3割は研修生出身で、窯元に弟子入りは減少している。出身地は7割が県内であるが、県外や海外出身者の参入は刺激となる。

データによって現状を見たうえで最後に窯元たちの作品を系統別に概観し、越前焼の未来についてそれぞれの考えを述べる。